第6回企画展示　江戸川職人・解体新書シリーズ・第1弾

工芸が息づくまち江戸川区

木に魅せられて

木の国日本　残したい技・伝えたい心

2009
9.18 fri
▼
12.13 sun
入場無料

ギャラリーコンサート「木の音色を聴く」

3F オープンギャラリーにて（入場無料）

木製楽器のエピソードトークと合わせて、
「木」の音色をお楽しみください。
意外なお話が聞けるかも知れません。
伝統工芸カフェ・アルチザンのドリンク片手に
リラックスしてお楽しみいただけます。

★ 工芸品プレゼント！ ★

カフェで「コンサートドリンク」をお求めの方に
コンサート終了後に抽選で
すてきなプレゼントを差し上げます。
○工芸品（しおり、ストラップなど）5名様
○カフェチケット 20名様

9月28日（月）午後7時～
津軽三味線：小林史佳

10月24日（土）午後3時～
琴琶：ジョージ・W・ギッシュ
（江戸川区観光人生大学・国際コミュニティ学科長）

11月23日（月・祝）午後3時～
弦楽四重奏：カルテットミュゼ

しのざき文化プラザ

しのざき文化プラザ 企画展示ギャラリー
3F

〒133-0061 江戸川区篠崎町7-20-19 3F　TEL.03-3676-9071（代）
最寄駅徒歩・篠崎駅西口徒歩
開館時間／9：00～21：30（年末年始休館：12/29～1/3）
www.shinozaki-bunkaplaza.com

工芸が息づくまち 江戸川区

古代より木と向き合ってきた日本は、木を活かし器物を愛する心を養ってきました。
その伝統を伝えてきたのは職人たちの「**手の記憶**」です。
江戸川区内の工芸士たちの木の命をめぐる思い、手技の妙技を紹介します。

❖木を組む
高梨伊之吉（指物）
田中松夫（江戸家具）
鈴木菊松（木工）

❖木を彫る
廣野勝（彫刻師）

❖木を塗る
山口敦雄（漆芸）

❖江戸の粋と折り
一ノ谷福一（組工芸）
鈴木笑子（雛飾）
松井宏（江戸硝子）

❖竹を編む
大野勝見（竹籠・バイスケ）

魔法のような指先が作る、竹の器

パイスケ・竹籠　大野勝見

おおのかつみ　1925（大正14）年、江戸川区海小沼生まれ。
竹籠工職人の4代目として子どもの頃から家業を手伝い、以来70余年パイスケの制作に携わり今日に至る。
1986（昭和61）年、江戸川区指定無形文化財（芸技術保持者）に認定。

子どもの頃からこき使われて、学校から帰ってくると仕事してたね。戦前はパイスケ、梨籠、烏籠、軍鶏籠（しゃもかご）、戦後は区役所の机の下にあった紙くず籠なんかもたくさん作ったね。材料のない時代、すぐに生長する竹はいろんな細工物になって暮らしに根付いてたんだね。素材は今も昔も変わらず、篠竹（しのだけ）です。昔は竹屋が材料を仕入れてくれたけど、今は静岡県裾野市の竹を自分で仕入れにいきます。採りに行くのは、年一回。12月末から1月初旬です。一年物のこの時期の新竹じゃなきゃ、ダメなんですよ。2月になると竹は水気が増えて虫がわくし、夏竹は編んでいくと竹がまるまって壊れやすくなるんです。ウチの竹籠はお相撲さんが乗っても壊れないよ。材料はしなやかなのに、編むとこんなに丈夫になるんだよね。

竹割り機で篠竹を割ります

6～7巻ほどで用途によって使い分けます

竹籠は底面から編み始めます

◇バスケットがパイスケに?!

竹で編んだ大きな籠のことをパイスケといいます。昭和30年代頃まで、港や工場で材料や製品を運搬するのに盛んに使われていました。特に港では人力で荷物を陸揚げする際、軽くて丈夫なパイスケはなくてはならない道具でした。パイスケという名は、バスケットから転じたとも、ポイっと捨てられることからポイならぬパイに転じたともいわれています。

◇1日25個の早業

「一人前か半人前かは、数をこなせるかどうか」と大野さん。編み方は2～3日で一通り覚えられるそうですが、スピーディに編み上げていく職人になるには熟練が不可欠なのです。最盛期には大野さんはリアカーで商品を納めながら、篠竹を割る材料作りも含め、1日25個ものパイスケや竹籠を作ったそうです。

◇篠竹（しのだけ）が用いられるワケ

肉が薄く、加工しやすく、丈夫な篠竹。節がほとんど凸状にならない篠竹は、矢竹とも呼ばれ、矢の材料として使われていました。また篠竹は、釣り竿や団扇の骨、筆の管、土壁の芯になるコマイにも重宝されています。海外でも数多見られる竹籠ですが、大野さんの籠が丈夫な理由は、編み方はもとよりこの材料選びにこだわりがあるからです。

底面から側面を立ち上げるところ。平面が立体になる造形の妙

手際よく編み上げていきます

最後は「籐（とう）」で仕上げます

江戸扇子

松井 宏

職人の遊び心が粋の源泉

まつい・ひろし　1947（昭和22）年、江戸川区生まれ。
1968（昭和43）年より扇子造りを始め、
1972（昭和47）年より父・和治郎氏の後継者として家業を継ぐ。
1989（平成元）年、2001（平成13）年、伝統工芸技術保存委員会賞受賞。

細かな作業が多いんですが、今では手が勝手に動くようになりましたね。扇子づくりには、リズムがあります。一息で扇面を折り、扇の骨となる竹をすっと差し込み、拍子木でトントンと叩いてのりをなじませます。そうしてリズムよく仕上げた扇子は、閉じた時、パチッといい音がします。これも江戸扇子ならでは。歌舞伎の舞扇も、落語家が持つ高座扇も、基本的な作り方はどれも同じです。ただ舞扇の注文を受けても、その世界のことを知らないと話にならない。それに、舞台を見れば扇子を作る私にも熱が入ります。だから歌舞伎を見たり、落語を聞いたり、技を身につけた後も勉強は欠かせません。遊び心を知っていれば、粋か不粋か、上品か下品か、瞬時に判断できるようになるんです。

型紙で挟んで一気に折り目付けます

わずかな隙間に差し込まれる扇骨（せんこつ）

拍子木でリズミカルに叩き、和紙と骨をなじませます

◇団扇から檜扇、そして扇子へ

コンパクトに折り畳める便利で機能的な扇子は、平たい団扇が伝来した後、日本で考案された道具といわれています。檜の薄片からなる檜扇が、紙でできた扇子に進化していったのです。扇が初めて登場した日本の文献は『続日本紀』。762（天平宝字6）年に、功績のあった老人に宮中で扇を持つことを許したと綴られています。

◇江戸扇子と京扇子の違い

江戸時代に生まれた江戸扇子は、江戸風味に磨かれ、元禄時代には庶民にも普及していきます。江戸扇子は京扇子に比べ、骨が15～18本と少なく、折幅が広いことが特徴です。また華美な京扇子に対して、図柄は地味ながらもシンプルな風情を表しているものが多いことも特徴です。白地を活かした余白の美もまた、江戸の粋なのです。

◇扇骨の種類はバラエティ豊か

黒竹、胡麻竹、虎竹、女竹など、扇骨の材料になる竹の種類はさまざま。中でもよく使われるのが真竹です。節と節との間隔が長く、しなりがいい真竹は、扇骨に適しているからです。使うほどに皮にツヤがでることも真竹の利点です。以前は茅葺屋根の母屋に使われ、囲炉裏で長年燻され、材質が強くなった、天然のススも扇骨にしたそうです。

能面　鈴木笑子

木と語らい、心を打つ、幽玄（ゆうげん）の世界

すずきえみこ　1944（昭和19）年、疎開先の江戸川区一之江で育ち、春江町に移り、現在に至る。
1990（平成2）年、面打ちを始め、後に高澤統一氏に師事。
2005（平成13）年、江戸川区伝統工芸展総合賞受賞。

長い歳月をかけて育つ木には、一つとして同じものはないんです。木材になっても木は生きていますから、木の声を聞きながらノミを入れます。能はひとつの面（おもて）で、悲しみも喜びも表現する芸能です。見る角度や明かりの加減で表情が変化する、そんな面（おもて）を創ることが醍醐味でもあり、また難しいところですね。だから、電車の中でも周りの人の表情をよく観察しています。クセになっちゃったんですね。慎重にノミを入れていても、左右対称ではない木目に、知らず知らずのうちに惑わされてしまうこともあります。そこを気遣いながら、心を静めて、面を打ちます。平らな板から、面を打ち、彩色し、研いで完成する、長い工程です。でも、木をいじっていると自然と心が安らいでくるんですよ。

細い面相筆（めんそうふで）で何度も塗り重ねます

大振りの板目（ヒノキ）は男面向き

目に入れる金物も自作します

❖能における能面の意味

600 年もの間、演じ継がれてきた能は、世界に誇る日本の伝統芸能の一つです。能舞台は神が宿る場所とされ、演者は生身の人間ならぬものとして舞います。そのため、個人を棄て、人格を変える道具として、能面をつけて舞うのです。能面には美しい女や男をはじめ、神の化身である翁（おきな）や鬼女、般若（はんにゃ）など、基本型だけでも約 60 種あるそうです。

❖面には柾目（まさめ）が基本

能面には主に檜（ひのき）が使われます。加工しやすい檜の中でも木曽檜は、年輪が細かくヤニが少ないため面に適しています。柾目は木の芯に対して直角に、年輪を断つように切り出したもので、高価ですが、反り返りが少なく面に適しています。年輪に沿って木取りする板目も使われることがあります。

❖古の能面師の知恵「こくそ」

ていねいに彫っていても、予想に反し板からヤニやフシが現れることがあります。そうした場合、昔から使われてきた修正方法が「こくそ」です。ヤニやフシをくり抜き、「こくそ」をもって傷口をカバーする技法です。「こくそ」はノコギリで板を削った際、できる檜（ひのき）の粉をすりつぶし、天日干しして、さらにねったご飯を加え作ります。

錺工芸 一ノ谷禎一

木を護り、神仏の“依代”を荘厳する

いちのたにていいち　1967（昭和42）年、亀戸の漆屋（漆工芸）の長男として生まれるが、高校卒業後、父の勧言により錺屋に弟子入りし錺師となる。
独立後、2003（平成15）年より江戸川区平井に工房を移す。
1998（平成10）年東京都優秀技能賞受賞。

古い宝物殿などを見ると圧倒させられるよ。なぜここまでと驚かされるほど、手をかけて作られているんです。お金じゃないんですね。職人も信仰心が厚かったんだと思います。それとは違うけど、私にも似たような感覚はあります。他にはない、いい仕事をしたいって気持ちです。本来は社寺建築の木地を丈夫にするために、錺金具はあったと思いますよ。垂木の木口の腐食を防いだり、釘を隠したり、機能中心だったものが、神仏の「依代」である社寺や神輿を荘厳するために、装飾的に進化していったんです。手がけた仕事がずっと残るのが錺金具です。だから手を抜けない。でも、作った金具を納めるとほっとして満足してしまう。そこが職人としてまだまだって思えるところなんですけどね。

様々な文様を打ち出す鏨（たがね）の数々

細心の注びで文様を打ち込んでいきます

唐獅子・牡丹

❖600本もの鏨

錺金具は一枚の銅板や真鍮板に文様を打ち、切り出し、磨かれ作られます。その工程で欠かせないのが、鏨（たがね）です。銅製の打つ鏨、切る鏨、巴など文様を入れるための鏨、檜の木の鏨など、一ノ谷さんは600本もの鏨を次々に取り替えながら、作業します。文様のための鏨は、同じ巴でも印鑑のように微妙に形が違うため、誰の仕事か一目瞭然です。

❖神具、仏具から家具、装飾品まで

社寺建築や神具、仏具、神輿などに見られる錺金具は、襖の引手などの室内装飾、箪笥の把手などの家具として一般に浸透していきました。かんざしや帯留めなどを作る錺職人もいます。一ノ谷さんは神具、仏具、神輿が専門で、成田山深川不動尊の大日堂の荘厳仏具や護摩壇をはじめ、西新井大師、増上寺なども手がけられています。

❖代表的な文様、唐草

獅子や鳳凰、牡丹など、打ち出しにより描かれていく文様にはさまざまありますが、代表的なものに唐草文様があります。日本では風呂敷の柄としておなじみのこの文様は、蔦（つた）を図案化したもの。蔦が渦を巻く唐草は、エジプトや古代オリエントでは豊穣のシンボルとされ、渦は躍動する生命の原理そのものを表わしているといわれています。

どっしりとした作業台はケヤキです

漆芸

山口敦雄

漆、ただものではない深みと艶（つや）

やまぐち あつお　1953（昭和28）年生まれ。
3代目となる父親の時代に江戸川区船堀に移り、
16歳から「山口漆芸」の4代目として修業を始める。
1992（平成4）年、1997（平成9）年、江戸川区伝統工芸展区長賞受賞。

英語でJAPANと言えば漆器のこと。日本の漆器は、世界が認める工芸品なんだよ。漆黒（漆器独特の深い黒）にするためには、塗り→乾燥→研ぎを少なくとも30回以上繰り返します。地味で単調な仕事だけど、きれいに仕上がった時は、やっぱり嬉しいね。飽きるけどね。駿河炭（するがすみ）で塗った漆を平たくしながら漆を密にしていくと、鏡のような光沢感が出てくる。もちろん、塗りや研ぎだけじゃなく、乾燥のさせ方でも発色が違ってくるし、漆芸には熟練の技が必要だよ。師匠である父に修行中に先立たれ苦労もしたけど、たくさん失敗したからこそ技も磨かれたんだと思うね。木地師（きじし）も塗師（ぬりし）も減ったけど、漆は塗り替えれば元通りになる、優れたリサイクル技術。漆器のその良さを今こそ見直してほしいね。

漆と砥の粉を入念に練り合わせます（漆塗用）

塗った漆をさらになめらかにする「研ぎ」

研ぎ炭も用途によって使い分けます

◇縄文時代からあった漆器

中国から渡ってきた漆塗りの技術が、日本で用いられるようになったのは、今から約7000年前の縄文時代前期といわれています。貝塚から出土した土器や木器の漆は、現在でも美しい肌を保っています。また漆は単に塗料としてだけでなく、防腐、防水、防虫などの作用もあり、塩分や酸、アルコールに強く耐性があることから、長く愛用されてきました。

◇湿度が高いと乾燥する?!

普通、塗料は気温が高く湿度が低いと乾きますが、漆は湿度が高くないと乾きません。漆が固まるのは湿気で漆が酸化するためで、それゆえ湿度が高くないと漆は乾かないのです。山口さんの工房にある乾燥用の戸棚も、壁はカンナのかかっていない板で湿気を保つように工夫されています。

◇ヘラづくりは割材を使う

自分で作った道具を何百回何千回と使いこなして、力の入れ方や加減を覚え、職人は技術を身につけていきます。漆と砥の粉を混ぜ合わせたり、地塗りをする大小さまざまなヘラの素材は、カンナのかかっていない割材。木目に合わせて自然に割った木は、木質に合わせて削ることで反ったりしないからです。

漆は漆液に入れ空気を遮断して保管します

看板彫刻

細野勝

小刀だって、木に生命を与えることができる

ほそのまさる　1933（昭和8）年、横浜生まれ。
16歳から浅草参拝で看板彫刻を学び、その頃に老職人より彫師技法伝承。
1966（昭和41）年、東京西で開業。1993（平成5）年、
江戸切子伝統工芸師にて区長賞。2003（平成15）年同師技術賞受賞。

浅草寺編額

小刀一本と腕一本で、看板を作るのが看板彫刻師です。文字を書き、彫刻、彩色、仕上げまで、一人で全部行います。昔は分業でしたが、浅草寺の観音様の扁額（へんがく）も、私の若かりし頃の仕事なんですよ。看板彫刻の基本は、小刀でV字形に彫っていく「薬研（やげん）彫り」です。単純な道具ですが、使いこなすのが難しい。一枚の板にも冬目と夏目があってね、目の細かさや堅さが微妙に異なります。刃先から手に伝わるその木の感触を読み取りながら、彫っていきます。プラスチックの看板はできた時が一番きれい。逆に、木彫看板はできた時は地味です。でも、味があると思いませんか。看板を掲げた店が信用を得て繁盛する、その歴史とともに看板も風合いが増していくんですから。

小刀の向きを変えながらV字型に彫り込みます

◇日本における看板の始まり

701（大宝元年）に発布された「大宝律令」には、「市にたつ店は、商品を標識で示すこと」といった記述があります。商品を標識で示す看板は、すでにこの時代からありました。日本に現存する最古の木彫看板は、御殿（ごてん）堂の懸立（かけたて）看板（皮屋文庫蔵）とされ、鎌倉時代のものといわれています。

◇洒落っ気も伝統文化

室町時代には「懸板・掛板」とされ、江戸中期には「看板」になりました。商売の競争相手が増えた江戸後期に、自らの店の商品を宣伝するものとして盛んになります。鍵の形をした鍵屋の看板や「風」と書かれた帽屋の看板など、洒落っ気や言葉遊びを利かせた看板は、江戸の庶民が生み出した文化となっていったのです。

◇薬研彫りの語源とは

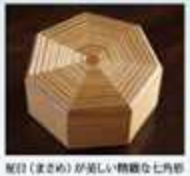
薬研とは、薬の材料を粉末にするため用いられていた器具のこと。舟形の器に材料を入れ、中心に把手がついた円盤を動かし、材料を砕きます。舟形の溝はV字。彫り跡の断面が同様にV字形であることから、小刀を左右から交互に入れて彫る技法が、薬研彫りと呼ばれるようになったのです。ちなみに三角刀で彫ったものは薬研彫りとはいいません。

木工

鈴木菊松

360度÷7＝職人技

すずききくまつ　1924（大正13）年生まれ。
15歳で木工職人に年季奉公に入り、1958（昭和33）年に小松川で独立。
1990（平成2）年、江戸川区指定無形文化財工芸技術保持者に認定。
1994（平成6）年、江戸川区伝統工芸技区長賞受賞。



屋目（まさめ）が美しい物職な七角形

正確な設計図が欠かせません

変わり者っていわれるよ。千社額の木地や注文家具を作っていた職人だからね。菓子器のような小物は普通はやらない。戦前、機械の部品になる鋳物の型を随分作ったからね。木型を作る技があるってことは、原図が描けるってこと。だからできるんだよ。五角形は他でも見るけど、七角形はまず見ないでしょ。360度は7で割れないからね。長年さまざまな木を扱ってきた職人だからできる案配なんです。図面も描くけど、作るのは自分の腕だからね。カンナだけで木を削り、七角の蓋と器はどの面でもぴたっとハマるように作るんです。材木は若い頃から集めていたね。好きなんですよ。木には一つひとつに表情があって、これでこれを作ってみたいなと気持ちが高揚してくるんです。

様々な木の表情がおだやかな空間を演出します

角の受しさが確かな技を物語ります

◇神代杉

神代杉は、土の中に何千年と埋もれていた杉の木のこと。火山の噴火や崖崩れ、洪水などにより、土の中に酸素のない状態で閉じ込められた杉は、腐食せず、ただし土中の成分の影響を受けて茶や黒に変色して出てきます。菊松さんのコレクションは、山形と秋田の境にある鳥海山から出た黒神代です。

◇白檀

古くから香木として珍重された白檀は、さわやかな甘い芳香を漂わせる独特の木です。日本では囲炉裏枢などに用いられ、茶室の炉には最高の枢材とされています。その他、仏像彫刻や数珠などの仏具や扇子の材料としても使われてきました。原産地のインドでも年々入手が難しくなっていて、現在は伐採制限や輸出制限がかけられています。

◇御蔵島の桑

伊豆諸島の一つで、三宅島の南方に位置する御蔵島。この小島の豊富な森が育てるハチジョウグワ。通称島桑は、工芸品素材として珍重されてきた銘木です。時間とともに黄色から琥珀を持った色に変化し、光沢を増す、その木目は美しく、多くの工芸師たちの創作意欲をかき立ててきました。材質は堅くて緻密。狂いが少なく粘りがあることも特徴です。

江戸組子

田中松夫

揃えて刻んで組む、確かな手技

たなかまつお　1943（昭和18）年、新潟生まれ。
大工の家庭に育ち、15歳で上京、建具屋に弟子入り。
1982（昭和57）年に独立し、江戸川区南篠崎に「建松（たてまつ）」を設立。
2006（平成18）年、江戸川区指定無形文化財に認定。
江戸川区指定無形文化財工芸技術保持者に認定。

昔は、仕事は盗んで覚えるものでね。親方の仕事を見て惹きこまれ、本を読み、独学で組子細工を覚えました。菱組（ひしくみ）というのがあって、まっすぐな木を組み合わせて菱形を作っていくんです。私はどっちかっていうとこれが得意。組手（くで）と呼ばれる凹凸の刻みを入れ、木と木をかみ合わせて作ります。組手がきちっとできれば、隙間のない、きれいな直線や菱形ができます。それは身体で覚えるしかないんです。狂いのない欄間（らんま）や障子（しょうじ）は、十年百年経っても姿が変わらないよ。私は機械に頼らず、ほとんど手技で仕事します。一つひとつ、木を組むのが性に合っているんだね。20歳の頃よりも、いいものを作れる自信はあるよ。でも、仕事は一生勉強なんです。私は今も修行中と思い、日々木と向き合っていますよ。

菱のワクに正確な角度とりで
切り込みを入れます

切り込みをはじき、菱にします

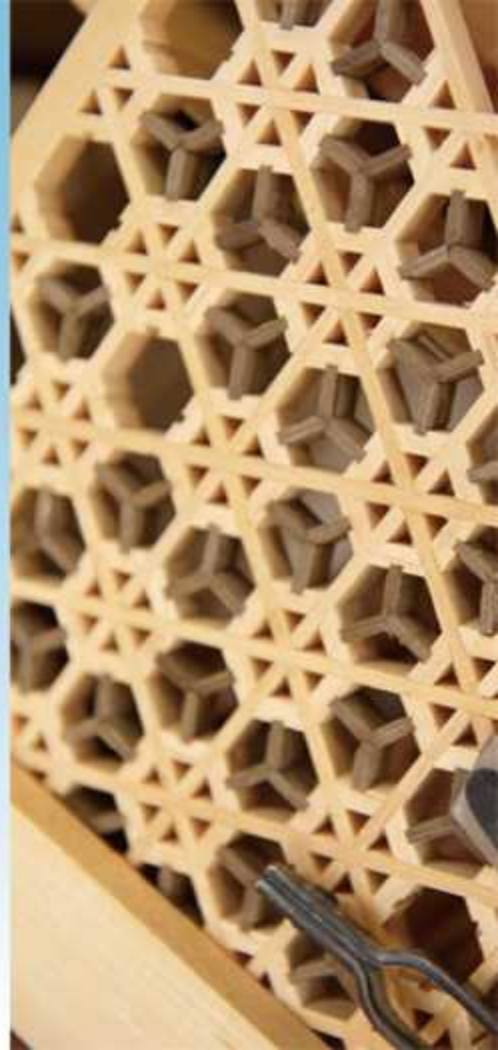
正確に刻まれたワク同士は、
ぴたりと合います

◇日本ならではの装飾法、組子細工

室町時代、寺院造の確立とともに建具が発展。障子の桟（さん）に細工を加えるといった組子が誕生しました。障子や襖（ふすま）など、建具は本来、空間を仕切る一枚の戸でした。毎日開け閉めするうちに立て付けが悪くなります。細かい木を組み合わせた組子細工は丈夫で、しかも軽く。装飾性にも優れていたことから重宝されたのです。

◇組子細工の妙技

組子細工とは、成型した細い木にくぼんだ凹の組手を加工し、釘を使わず、木と木を組み合わせてさまざまな模様を表現する工芸です。1ミリ以下の精度で加工されるその技術は、熟練した職人だけが生み出すことができます。細工は大枠となる菱などのワクと、その一部に模様を入れる花モノから構成されています。

◇江戸組子の木曽檜（きそひのき）へのこだわり

江戸組子は、板目を使う関西に対し、板の取れる割合が少なく反りなどの狂いが少ない柾目（まさめ）が使われることが特徴です。また田中さんの江戸組子は木曽檜を主な材料としています。その理由は、少し油っぽい木曽檜は弾力性があり細工しやすく、目が詰まっているため変形しにくいからです。木曽檜はあと数年でなくなるともいわれる日本三大銘木（めいぼく）のひとつです。